葉ノ秦皮(トチリコノ)葉ニ似タリ、兩葉各三四葉相對シテ、心葉ト共ニ七葉、或ハ九葉ヲ全葉トス、近年多ク實ヲ結ブ、全ク舶來ノモノニ異ナラズ、東都ノ一醫コレヲ得テ家園ニ種ユ、亦實ヲ結ブコト舶上ノ品ニ同ジ、然ルニ其葉官園ノモノヨリ微シ狹ク、一葉ノ形白棠樹ノ葉ニ似テ微シ短シ、天保十五甲辰歲、ソノ實ヲ東都ヨリ京師ニ傳ヘ種ユ、初生ノ葉ハ兩邊ニ鋸齒アリテ、和產ノ楝(センダン)ニ異ナラズ、此樹年ヲ經レバ、漸ク葉ニ鋸齒ナク成ルト云フ、藥舖ニ大和種ト呼モノ眞ノ苦楝子ナリ、城州鷹ケ峯ノ官園ニ一樹アリ、ソノ形圓クシテ苦シ、常ノ楝實ハ長ミアリテ甘シ、又本邦古ハ楝ノ木ヲ以テ梟首ノ桁トス、故ニ首ヲアフチニサラスト云、又俗ニセンダンノ艾ニテ燒クト云、因テ凶事ノ用ニ供シテ吉事ニハ用ヒズ、唐山ニテハ然ラズ、廣東新語ニ、苦楝最易生、村落間凡生女必多植之、以爲嫁時器物ト云ヘリ、

〔枕草子 三〕木の花は

木のさまぞにくげなれど、あふちの花いとおかし、かれはなにさまことにさきて、かならず五月五日にあふもおかし、

〔安齋隨筆 前編 三〕一獄門ノ樗木　古き書共に、首を斬て獄門の木に掛けると云事あり、樗の木を用るは誤也、和名抄に、楝、阿布智とあり、此訓古し、樗はむかし此方になき木なれば、獄門に植べき事有べからず、獄門に植しアフチハ楝の字也、何故獄門に楝を植しぞと云理は、何の書にも所見なければ詳に知れず、無證の推量の說は無益なれ共、愚私に推量するに、國言に血に穢るゝを血にあへるとも、あへ血とも云に付けて、血にアヘル意にて、楝の名のアフチといふを以て、斬首を掛ん爲に、此樹を獄門の前に植へたる歟、○下略

○按ズルニ、楝樹ニ梟首スル事ハ、法律部上編死刑篇ニ詳ナリ、

〔和漢三才圖會 八十 喬木〕椿 椿同　虎目樹　大眼樹　今云知也、牟知牟唐音之訛也　樗 臭椿也、和名沼天、　栲 山樗也○

香椿